

4月の植物

サクラのなかま（バラ科）

春は桜の季節。花見と言えはまず思い浮かべるのは桜という方も多いだろう。美しい花は数多あるのに、である。桜前線という言葉があるように、この花の開花時期は全国的に注目される。それほど日本では馴染み深い、好まれる花なのだろう。満開の桜の木の下で家族や友人、同僚とご馳走を囲み、飲食を共にする。日本の春の風物詩だ。最近では海外からのお客さんも増えていると聞く。桜の美しさに心惹かれるのは日本人だけではないようだ。

さて、「サクラ」だが、バラ科サクラ亜科サクラ亜属サクラ節の樹木の総称である。語源は動詞の「咲く」に複数を表す接尾語「ら」をつけたという説が有力だ。木全体が一気にたくさんの花で包まれる様子を表すにはいい名前だと思う。

日本に自生する野生種は、ヤマザクラ、エドヒガン、マメザクラ、カンヒザクラ、カスミザクラ、オオシマザクラなどがある。これらを原種に自然交雑や変異によってできた種や人工的な交配によって作られた多くの品種がある。合わせて300種以上のサクラが日本に生育している。最も代表的な野生種はヤマザクラ。花と同時に開く赤みのある若葉が美しい。今月の観察地、馬渡島には変種のツクシザクラがある。白い大きな花と緑色～紅色の若葉が海岸に映える。

古来、日本の桜の名所として名高い奈良吉野の桜はヤマザクラである。かつて、花見といえはこのヤマザクラだった。対して現在、最も多く植えられている品種はソメイヨシノ（染井吉野）。江戸時代、染井村で植木屋さんが作ったとされるこのサクラは、エドヒガンとオオシマザクラの種間雑種と言われている。江戸にいながら吉野の桜が見られるという触れ込みだったらいい。その後、全国に広がり、今では間違いなく花見の主役だ。

『ときめく花図鑑』の著者、中村文さんは桜の散り際を、「時が来ると花は迷いなく風に身を委ね、空に踊ります。好きなところへお行きなさい。木にそう言われたように花の自由を見て嬉しかったり、寂しかったり。自分では気づくことのなかった心の機微を桜はたまに教えてくれます。」と書いている。今まで散る桜には終わっていく残念な感覚がつきまとっていた。新しい場面の展開に向けて自由に好きなところへ飛び立っていく。そう考えると4月、人生の節目にますますふさわしい花に思えてきた。

（文：神代智子 写真：広滝 慎）

